



日造協ニュース

2016.1月号
通巻第502号
Japan Landscape Contractors Association NEWS

発行：一般社団法人日本造園建設業協会 編集：広報活動部会 <http://www.jalc.or.jp>
〒113-0033 東京都文京区本郷3-15-2 本郷二村ビル4階 TEL:03-5684-0011 FAX:03-5684-0012

本号の主な内容

新春特別号

活力ある日造協を目指して 会員拡大と活動の充実に向けて



熊野速玉大社（くまのはやたまたいしゃ）のナギ

国道42号線を和歌山県側から三重県側に渡る熊野大橋手前にある信号を左折すれば直ぐに世界遺産、熊野速玉大社が鎮座されています。この熊野速玉大社の参道に、平重盛（平清盛の嫡男）が、平治元年（1159年）に社殿完成を記念して植えたといわれるナギの木（昭和15年2月10日に国の天然記念物に指定）があります。基部の幹周りが約5.4m、目通り周りが約4.45m、高さ約17.6mの巨木である（出典：和歌山世界遺産センター）。ナギは風に通じるとして、昔から海上安全、家内安全、和楽の信仰があり、熊野詣での証しにナギの小枝を手折った事が古書にも記されています。ナギの葉は、縦方向だけに葉脈があり、横には裂きにくいことから、縁結びの印とされていて、昔は、嫁いでいく娘の鏡の裏などにこの葉を忍ばせ、無事に添い遂げられるように折ったと言われていました。また、ナギの実で奉製した「なぎ人形」は、家内安全のお守りとしても有名で、社務所では、カップルになった「なぎ人形」を販売していますので速玉大社を訪ねられた折には、ぜひお土産になさってください。藤原定家が訪れて詠んだ「千早振る熊野の宮のなぎの葉を変わらぬ千代のためしにぞ折る」という和歌は歌集「拾遺愚草」下巻に収められています。（和歌山県支部）

謹賀新年

一般社団法人日本造園建設業協会

会長 藤巻 司郎

年頭に当たって

造園建設業の明るい未来のために

新年明けましておめでとうございませう。

皆様には、新たな希望を胸に輝かしい新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

この一年が、造園建設業界にとつて、造園力を発揮する機会と場が広がり、持続的な発展を見通すことのできる明るい年になりますことを、心から祈念しております。

さて、わが国の経済社会情勢は、安倍政権が「アベノミクス」で放った3本の矢により、デフレ脱却へと局面が大きく転換しました。今年は、景気回復の芽が、経済の好循環の波に乗って全国隅々に花開くまでに好転してほしい、と願っております。さらに新3本の矢により、未来に向け「希望・夢・安心」をキーワードに経済社会の力強さや国民生活の豊かさが進展することに、大いなる期待を寄せております。

造園業界を取巻く状況も、昨年の「担い手3法」の施行に伴い、大きく変化しつつあります。日造協が長年にわたって取り組んできた要望・提言活動が実を結

び、労務費単価の改善やダンピング対策の強化措置等が着実に講じられるようになりました。

また、公共事業費の維持・確保によつて、ようやく景気回復が歩を進めつつあると感ずるようになった一方で、依然として将来的な事業見通しが不透明で、積極的な投資判断を下すには難しい局面が続いていることも事実であります。

このような時こそ、時代の変化に対応した機動的な活動とともに、中長期的視点に立ち、将来の発展の礎となる事業量見通しなどの環境整備や次代を担う人材の育成・確保に力を注ぐことが何よりも大切な事柄と云えましよう。

このような状況を真摯に受け止め、造園建設業の活動領域の拡大と働く人がやりがいを感じ、誇りを持てる明るい未来の魅力ある環境づくりに、この一年、皆様とともに取り組んでいきたいと考えています。

本年も皆様のご指導・ご協力、ご支援を宜しくお願い申し上げます。



日造協の機関紙は、昨年11月に創刊500号を迎えました。記念号にあたり部会ではさまざまな議論を交わし、500号ではこれまでの日造協を振り返り、これからの日造協については、新春座談会で語っていただくこととしました。また、座談会のメンバーは、日造協が喫緊の課題として取り組んでいる会員拡大や女性就業促進を踏まえ、その担当部会である「会員拡大プロジェクトチーム」、「女性就業促進検討特別部会」の方々にお集まりいただくのが時宜を得ており、両部会を抱える「アクションプログラム推進等特別委員会」の和田新也委員長に司会をお願いすることにしました。ご参加いただいた方々に御礼申し上げるとともに、この座談会からこれからの日造協を展望し、会員拡大と活動の充実に役立てていただければ幸いです。(広報活動部会長 成家 岳)

座談会出席者

- (司会) 和田 新也 (一社) 日本造園建設業協会副会長、アクションプログラム推進等特別委員会委員長
- 持田 正樹 氏 (株)もちだ園芸 代表取締役 (会員拡大プロジェクトチーム部会長)
- 土志田 淳 氏 横浜庭苑(株) 代表取締役 (会員拡大プロジェクトチーム)
- 下地 浩之 氏 (有)西原農園 代表取締役 (会員拡大プロジェクトチーム)
- 酒井 一江 氏 (株)淡窓庵 代表取締役 (女性就業促進検討特別部会部会長)
- 井上 優美 氏 (株)山梅 公施設管理運営部課長 (女性就業促進検討特別部会)
- 松戸 幸子 氏 (株)新松戸造園 (女性就業促進検討特別部会)

- オブザーバー：藤巻 司郎 (一社) 日本造園建設業協会 会長
 林 輝幸 (一社) 日本造園建設業協会 副会長、総務委員長
 高梨 雅明 (一社) 日本造園建設業協会 常任顧問
 成家 岳 (一社) 日本造園建設業協会 総務委員会広報活動部会長

和田 今回の座談会は、「活力ある日造協を目指して」がテーマで、その具体的な対応を行っている2つの部会が注目され、お集まりいただきました。そこで、まずは部会長さんから、自己紹介と現在の造園業、日造協についてどう思っているかをお聞きしたいと思います。



持田 正樹 氏

持田 会員拡大プロジェクトチーム(PJ)の部会長と理事、島根県支部長を務めている持田です。部会長の話がいった際、地方の私が長を務めるのは、機動性なども含め心配でしたが、地方の会員がかかわっていく事例の一つにでもなればと、やらせていただくことにしました。

PJについては、昨年の8月号など、日造協ニュースで紹介されているとおり、本格的に活動を開始し、各総支部でそのための勉強会や入会促進のための説明会を開催するほか、地域リーダーの方々にも協力していただいています。

会員拡大とあるので、会員を増やすことも当然の目的ですが、こうした取り組みがきっかけで、会員の交流が活発になっていくことも、一つの成果だと思っています。

業界や日造協の現状については、若い方々が非常に前向きで元気があり、優秀な方が多く、日造協は人材の宝庫だと感じています。また、経験豊富なベテランの方々の力もあるので、老若男女を問わず、さまざまな力をどのような方向で、どう集約していくかが大事であり、焦らずコツコツと進めていければと思っています。

酒井 前期まで日造協の理事をし、今期は

顧問、6月から女性就業促進検討特別部会の部会長を拝命しています。部会は、活発に討議し、年度末に向けたまとめに入りたいと思っていますが、取り上げたテーマは数多く、働き方、ライフワークバランスをはじめ、女性を魅力的にみせる職場であって欲しいので、女性の仕事着・ウェアもこだわり検討しています。

業界については、私が仕事を始めたのは都市公園等整備五ヶ年計画の初年度となる昭和47年の翌年で、以降、予算が増大しました。そしてある時期をピークに減少し、現在に至りますが、お金がたくさんあったからいいものがたくさんできたかという一概にそうでもない。

私は知恵を出し合うことが、これから大切であり、若い方は基より、この業界は高齢の方々も非常に元気な方が多く、国の施策でもダイバーシティ(多様な人材の積極的活用)が取り上げられているように、それぞれが持てる力を積極的に発揮し、日造協や業界を盛り上げていけるといいと思っています。

井上 現在、公園の管理運営に携わっている井上です。高齢結婚、出産を経て、今年、会社に復帰したところですが、母親目線を活かせればとの会長、社長の配慮で、当社が10年来指定管理を行っているぐんまこどもの国で働いています。

今日は、女性の意見をはじめ、ダイバーシティという言葉も出しましたが、当社テーマは「グリーンダイバーシティ」を掲げており、そうした観点からお話ができたらと思っています。

土志田 横浜から来た土志田です。今日は私の想いをお話できればと思っています。よく「造園の魅力は何か？」が話題にされますが、私は「人と社会に感動を与えられる産業」だと思っています。それは、農業から建設業、そしてサービス業と、一次産業から三次産業までの多様性が造園にあるからで、それだけ多くのものを造園は人と社会に提供できます。この魅力を一人でも多くの人に伝え、会員拡大につなげたいと思っています。

松戸 私は大学で造園を学び、そのときに主人に出会い、主人の実家である造園会社で、総務、経理といった裏方をしています。

特集

新春座談会

**活力ある
会員拡大と**

造園というものを若い人、知らない人にどう伝えたらいいかを思案しているところで、自分の子どもにすら、造園を説明するのが難しい状況です。

また、仕事と母親業をする中、実父が脳梗塞になり、実家にも通わなければならず、女性の仕事と家庭の両立について考えていければいいと思っています。

下地 地方の声ということで沖縄から参加

させていただいた下地です。ですから、その立場からお話し、いただいたお話しは、地元を持ち帰り、情報を共有し、議論を深めていければと思います。

日造協沖縄県支部、沖縄県造協ともに会員は減少傾向にあり、日造協支部と県造協が別に語られることもあります。私は共に語れるものだと思っています。そうしたことも今日はお話できればと思います。

業界のプラットフォーム、会員の横のつながりを

和田 日頃のお仕事や日造協への期待や課題をいただきましたが、日造協について思っていることがあれば、もう少しお聞かせいただけますか。

土志田 前述の「造園の魅力は何か？」とともに、「日造協に入るメリットは何か？」もよく聞かれます。

メリットはたくさんありますが、私は端的に「日造協には造園の頭脳と情報があるから」と答えています。

頭脳は何かというと、実際に法律や政策にかかわられてきた方が日造協の顧問等に歴代いらっしゃいますし、情報は法改正や必要な各種情報が的確に入り、業界の方向性も会報などで示され、全国の情報も集まっています。

適切な表現ではないかもしれませんが、会員の側からすれば、こうした情報を利用すればいいのです。協会という組織をどう捉えるか、魅力、存在意義、有効性は、感じ方の問題といえますが、実際に私は日造協からいただいた情報を地元の議論に役立てていますし、実を結ぶこともあります。

地元で議論し、提案しても、法律の壁もあり、専門家でないとは分かりませんが、そのときに相談できるのが日造協であり、その存在は大きいと思っています。

和田 頭脳や情報を活かすという話がありましたが、松戸さんいかがですか。

松戸 日造協からの情報は、造園業に欠かせず役立ちますが、職員にどう伝えるか、それが会員としての一体感になるかという、難しいのが現実です。

私は日造協と会員企業のかかわりだけでなく、会員同士の関係や会員の職員同士の交流をもう少し深められるといいと思っています。そういうつながりができるともっと活発になるのではないのでしょうか。

酒井 現在も各委員会や事務局の方は相当頑張っておられるので、さらに有機的につながるとすごい力になるとと思っています。例えば、地域リーダーの活動などに次世代のリーダーがどんどん加わっていったらいいですね。

そのような会員のプラットフォームになる場ができると、いろいろな意見が出てくるでしょうし、そこで意見を交わすことで、つながりも深まります。

近畿で女性10人が集まりましたが、活発な意見交換の場になりました。女性同士で、共通の話題があることや、年齢特有の課題など、テーマによっても話しやすく、活発な意見交換ができると思います。



酒井 一江 氏

また、造園の仕事は多様なので、現場、事務の方といった職能別のグルーピングも考えられます。このように意見交換すると、自社の中では分からなかった自分の仕事の位置づけもより明確になると思います。

持田 地域の会員同士は仕事上の交流はあると思いますが、日造協や業界のことで意見を交わすことは、総支部での意見交換会くらいなので、そうした横のつながりがあるといいですね。

土志田 これはイメージの問題ですが、日造協は敷居が高いと思われているのではないのでしょうか。実際、そんなことはないのでは、日造協が会員やその職員の拠り所になれたらいいと思います。

下地 横のつながりをもっとというのは、逆に、お互いを知らないということだと思います。地域では、どちらかという県造協が主体だったりして、日造協の周知があまりとつなつかいかもしれません。お互いを知るといいと思います。

県造協に青年部があり、日造協の会員と会員でない人がいますが、今年、地域リーダーの研修が沖縄で行われ、総勢70名が参加し、横のつながり、仲間ができました。今後、これを継続していくことが大切ですが、同時にそれ以外の世代の人がどう横のつながりを持っていかも課題で、会員にあまねく情報が伝わりと業界が活性化するでしょうし、社会への広がりも期待できると思います。

沖縄の現状ですが、協会員は最盛期に比べ、県造協は86社から49社、沖縄県支部は56社から24社に減少し、造園事業も110億円から45億円と半減しています。

県造協に入っていれば日造協に入る必要がないという声も聞きますが、この変化を見てわかるとおり、造園業という括りで

支部長

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| 沖縄県 | 鹿嶋市 | 宮崎県 | 大分県 | 熊本県 | 長崎県 | 佐賀県 | 福岡県 | 愛媛県 | 高知県 | 香川県 | 徳島県 | 山口県 | 島根県 | 鳥取県 | 広島県 | 岡山県 | 和歌山県 | 奈良県 | 兵庫県 | 大阪府 | 京都府 | 滋賀県 | 福井県 | 三重県 | 愛知県 | 静岡県 | 岐阜県 | 石川県 | 富山県 | 新潟県 | 長野県 | 山梨県 | 神奈川県 | 東京都 | 千葉県 | 埼玉県 | 群馬県 | 栃木県 | 茨城県 | 福島県 | 山形県 | 秋田県 | 宮城県 | 岩手県 | 青森県 | 北海道 | 沖縄県 | 九州 |
| 森根 | 井上 | 徳川 | 佐藤 | 田中 | 久保 | 執行 | 高須 | 植田 | 古家 | 関 | 多々良 | 持田 | 西谷 | 坂本 | 小林 | 井内 | 中島 | 中西 | 大野 | 佐野 | 上田 | 宇田 | 水谷 | 大島 | 内山 | 小栗 | 北郷 | 久部 | 磯部 | 山崎 | 齊藤 | 山田 | 田丸 | 鈴木 | 渡邊 | 山田 | 増田 | 稲見 | 諸井 | 渡部 | 鈴木 | 大場 | 米内 | 三浦 | 嘉屋 | 森根 | 木上 | 九 |
| 清昭 | 恒一 | 信潔 | 保夫 | 豪裕 | 和男 | 英利 | 高須 | 植田 | 古家 | 関 | 多々良 | 持田 | 西谷 | 坂本 | 小林 | 井内 | 中島 | 中西 | 大野 | 佐野 | 上田 | 宇田 | 水谷 | 大島 | 内山 | 小栗 | 北郷 | 久部 | 磯部 | 山崎 | 齊藤 | 山田 | 田丸 | 鈴木 | 渡邊 | 山田 | 増田 | 稲見 | 諸井 | 渡部 | 鈴木 | 大場 | 米内 | 三浦 | 嘉屋 | 森根 | 木上 | 九 |

日造協を目指して 活動の充実に向けて

盛衰しているわけですから、県造協と日造協支部を分けて考えるのではなく、造園業として一体的に考えたいと思っています。

横のつながりという面では、以前は県造協で運動会やソフトボール大会を行っていました。しかし、近年そうした活動もなくなりました。こうしたイベントは仕事とは関係ないように思えますが、きっかけは何であれ、一緒に顔を合わせる機会自体が大事だと思います。

また、県造協、日造協にしる、メリットでも、そこで何かをしようというのではなく、造園業をやっているから業団体に入っただけという意識の会員も多く、そういう方々と業界を盛り上げていくことがこれからの課題だと思います。

松戸 主人が言っていることですが、「日造協に入っても国の仕事が取れるわけでもないし…」と、最初はお付き合いで入会したが、自分だけでなく、「日造協に入って使命感が増した」と言っています。

造園業界としての活動があるから、世の中に造園業が認められているのであり、国の仕事が取れるかどうかは関係なく、造園をいかに守り、発展させていくことが自分たちの使命だということです。

会員や職員の方々が同じ意識を持つのは難しいかもしれませんが、とても大事なことです。

井上 業界共通の課題について議論を交わし、活動しているのが日造協だと、私はイメージしていました。

しかし、部会に参加し、個人的に抱えている課題を共有でき、一緒に考えることができ、日造協の存在を身近に、ありがたく思うようになりました。

また、部会で「プレゼンテーションで困っている」という話が出て、早速、部会に合わせて、発表の仕方を学ぶ機会をつくっていただき、とても参考になりました。

プレゼンの良し悪しはとても重要ですが、一人で学ぶといっても、なかなかそうした機会を得るのは難しく、一企業で学びの場を用意するのも大変です。些細な一例ですが、私たちのレベルでの交流、集まる機会があると、そこで共通の課題もでてくるでしょうし、その対策も図ることができると思います。



井上 優美氏

「多様に広がる造園」と「造園の軸足」

和田 いろいろな職種、世代など、多様なプラットフォームとしての役割が日造協に求められていることの一つといえますが、他に何かありますか。

持田 確かに経営者レベルの話が多いかもしれませんが、私は日造協が持つ、つながる力を実感しています。

日造協の入会案内を考える際に、改めて日造協の会員構成を調べてみました。すると、年間売り上げ2億円未満が70%、1億円未満が半数でした。日造協は敷居は高くないという話もありましたが、日造協は造園大手が集まった組織ではなく、多様な会社で構成され、その多くが小規模な事業者です。

日造協が、一般社団法人としての公益目的支出計画が完了した後は、会員のニーズに応える活動を行っていくことをもっと考えてもいいと思います。

そうしていくことが日造協のこれからの活力、会員の拡大につながり、それが働きやすい会社、業界となって、活力を生み、社会、地域や経済の活性化につながるのだと思います。

地方は、民間に比べ公共事業の割合が高く、公共事業は新たな工事が少なくなり、低価格競争の維持管理がほとんどで、疲弊しています。これは他の業種も同様で、農業や林業も衰退し、耕作放棄地や里山の荒廃が進んでいます。

そこで、造園事業にこだわるのではなく、造園は幅が広いという話が出ているように、まちの緑や公園に限らず、造園の力をどう活かすかを考えていくと、農業や林業に取り組める素地が造園にはあり、これを造園力として捉えることもできるのではないのでしょうか。

地域活性化、地球温暖化対策、生物多様性保全、災害の緩和などのキーワードもありますが、そうしたことにも造園は貢献できます。

ですから、小規模企業の取り組み、地域に密着した事業など、造園力を活かした好事例を提供していくことなども、会員のモチベーションになり、そうした取り組みをお互いに活かしていくことが、日造協の活力になると思います。

また、社会変化、会員ニーズに対応した取り組みを進める一方で、造園の軸足はきちんとしておく必要があります。そうすると、分かりにくいといわれている造園の輪郭もはっきりすると思います。

和田 地域社会での造園業の役割については、事業創出にも大いに関係してくると思いますが、どなたかいかがですか。

土志田 林業の話も出ましたが、地方ではすでにみどり税とか、環境税のような取り組みがみられ、政府でも環境省と林野庁で、森林の保全を柱とした財源を確保する新たな税の創設が検討されています。

これらを活用した森林の保全、遊歩道や見晴台等の整備などについても、一社では到底できませんが、日造協を通じてアプローチができると思います。

和田 そういう具体的な話が出てくると議論もしやすいですね。

具体的ということで、先ほど日造協の役割や情報をいかに伝えるかという話が出ていましたが、具体例はありますか。

持田 いろいろと出かけることが多くなり、「また社長は日造協で出張かあ」と思う社員も多いだろうと、私は会合の資料を社員も見ることができるようになり、直接報告を行うようにしています。



土志田 淳氏

「特徴」と「特性」など、伝え方に工夫を

和田 社会保険未加入対策や担い手三法への取り組み、建設業法の例示などを分かりやすく伝えること、全員が理解するのはとても大切で、それを担っていただいているのが、オブザーバーとして同席している高梨常任顧問ですが、ひと言いただけますか。

高梨 日造協の会員やその職員の方々の仕事は多様性に富んでいます。公共事業中心の会社、民間中心の会社もあり、元請、下請の違いもあり、立場により求められるもの、求めるものが違い、さらに、職員レベルでの職種、ポジションでも違ってきます。

その多様さゆえに、日造協が頑張っって何かに取り組んでも、そのことに無関係な方が出てきてしまい、無駄なことと思われてしまうこともあります。このため私は、協会活動を進める上で、「特徴」と「特性」を区別して考えています。

特徴は、造園に限ったものではなく、造園としてどれだけウエイトを置くかという話です。

特性は、造園独自のもので、現場や事務などのポジションでも、造園独自のものがあ、造園の特性を誰がどうみてもわかるようにすることが造園業として重要です。しかし、この特性を共通基盤として整えることは大変な作業になりますが、これを形にしたものが日造協の資格制度である「街路樹剪定士」や「植栽基盤診断士」です。

プロ中のプロ、指導者を育成するのは大変なことですが、最近は、職長教育などにも取り組みを広げ、指導者の育成を行っています。総支部内にそういう指導者がいればいろいろな催しを行う際にも取り組みやすいでしょうし、その指導者が次世代を育成、継承していく仕組みを組織的につくりたいと思います。

こうした組織的な取り組みの一方、情報通信の発達で昔前は考えられなかったことが、どんどんできるようになったのが個人レベルの情報交換で、これを活発にするために日造協として何ができるかを早急に考えなければならず、そこから組織的に取り組む必要が生じたものについては、どんどん取り入れられるような循環ができればいいと思います。

酒井 特徴と特性は、各社レベルでも同じで、造園事業は共通していますが、そのウエイトは各社で違い、自社独自の特性を各社お持ちだと思います。同じことが各職員にも言え、それが明確になると、会社の立ち位置、自分の立ち位置がはっきりします。周りが見えないと自分も見えません。

共通するものは共に考え、個別のことは

個々に考えた方が効率的です。日造協として共通することは日造協でやり、個々の企業のことは当然個々の企業になりますが、企業で共通することは共に取り組むと、より効率的だと思います。

大きく世の中が変わってきている中で、会社の世代交代、協会のあり方なども変わっていくのであれば、そういう認識を確かにするいい機会だと思います。

和田 自社のアイデンティティが他社とどう違うのか、他社と比べ自社が進んでいる点、遅れている点は、他社や他者と交流しないとなかなか気づきませんね。裏方をしている松戸さんはそう感じる機会も多いのではないですか。

松戸 造園の話をする、これまで事務方の話はあまり出てきませんでした。事務方も造園独自の勘定科目などもありますし、部会に参加させていただき、同じ造園に携わる同じ職種の方と交流できるのはありがたいと思います。

裏方仕事は、現場に比べ少人数で、1人のところもあると思います。私は、現場のことが分かる事務方がいると、現場も動きやすいだろうと、それをモチベーションにして、仕事をするようにしていますが、社外であっても、同じ立場の人がいれば、連帯感が得られたり、切磋琢磨にもつながり、よりいい意味でのモチベーションになるのではないかと思います。

下地 課題は出てきています。具体的にどうするか。今後、どうやってつながっていくかだと思います。

先ほども話しましたが、気が付いているところはいいですが、そうでないところに分かってもらうことが大事であり、各社面談をするくらい、徹底的にやって分かってもらうことがあっていいと思います。

いままで十分に伝えるということをして



松戸 幸子氏

総支部長 四中近中北 関東 北海道 国 畿 部 陸 北										監事 森 正 小 大 北 加 渡 廣 矢 安 北 渡 米 森 森 持 廣 西 田 田 執 小 久 木 本 林 島 勢 部 澤 野 田 田 部 内 根 田 田 田 行 林 保 上 茂 大 典 七 朗 晴 界 充 佐 清 幸 茂 佐 吉 清 正 清 芳 敬 重 英 正 和 正 茂 大 典 七 朗 晴 界 充 佐 清 幸 茂 佐 吉 清 正 清 芳 敬 重 英 正 和 正 茂 大 典 七 朗 晴 界 充 佐 清 幸 茂 佐 吉 清 正 清 芳 敬 重 英 正 和 正										理事 阿 望 正 卯 和 林 鬼 藤 部 月 本 之 田 林 頭 卷 久 宗 勝 原 新 輝 慎 司 久 宗 勝 原 新 輝 慎 司 久 宗 勝 原 新 輝 慎 司										業務執行理事 阿 望 正 卯 和 林 鬼 藤 部 月 本 之 田 林 頭 卷 久 宗 勝 原 新 輝 慎 司 久 宗 勝 原 新 輝 慎 司 久 宗 勝 原 新 輝 慎 司										会長 藤 巻 司 郎 副会長兼業務執行理事 林 輝 幸 一 和 田 新 輝 幸 一 卯 之 原 新 輝 幸 一 正 本 大 昇 望 月 保 大 阿 部 宗 広 有 木 久 和 有 路 久 和 井 内 優 信 磯 部 久 和 宇 坪 久 和 宇 川 啓 人 梅 吉 真 澄 枝 島 嘉 七 大 場 啓 壽 大 本 寛 壽 奥 本 啓 寛 小 栗 勝 郎 加 勢 充 晴 北 勢 朗										賀春 一般社団法人 日本造園建設業協会									
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	-------------------------------	--	--	--	--	--	--	--	--	--

きませんでした。これはもったいないことです。退会してからそのありがたさが気が付き、再入会されることもあります。そうならないための具体的な取り組みメニューがあってもいいのではないのでしょうか。会員減少を防ぐのではなく、増やすのですから、当然そういうことをしていかなければならないと思います。

和田 つながること、伝えることが出てきていますが、井上さんいかがですか。

井上 入会についてはありませんが、先ほど話したプレゼンは、まさにどう伝えるかの技術で、共通しています。

私は、子どもたちに造園の素晴らしさを伝えたいと思っていますが、最近の子どもたちや若い人は「造園」という言葉自体が分かりません。でも、「環境」という言葉はわかっています。ですから、そうい

う分かりやすい言葉を選び、漠然としたイメージでも、相手の心に残るようにすることが大切なのではないかと思っています。

社内の話ですが、いろいろな会合等に出席する機会が多い会長や社長は、戻ってきながら、こういう内容があったと話してくれます。また、該当職員が会社を代表して参加することも多く、その都度機会を与えて下さいます。

社外の交流、つながりという話も出ていますが、社内の交流もこれまで以上に大切だと思ったり、こういう会社もあるよというのも一つの情報で、多様な情報があれば、共感する人も中にはいるでしょうし、多くの人が関心を持つものであれば、深めていくのも大事だと思うので、そうした情報の集まる場所があるといいと思います。

「本部」「支部」でなく、組織力を活かそう



下地 浩之氏

和田 他にこんなことも考えられるという具体例はありますか。

下地 造園ならではの経営管理、現場管理ソフトがあるといいです。似たようなものがあったとしても、造園では使いにくいものが改善されれば、それだけで作業効率が上がり、担当者のストレスも減ります。現場で困っていることをリストにしてみると、そういうものがたくさん出てくるかもしれません。それこそ一社ではできませんが、日造協だからできることだと思います。

高梨 人材の育成を図るとひとりでいっても、造園の場合、工種やポジションごとに必要な技術や資格が異なり、それに伴う安全教育が必要など、一人の職員が現場でマルチに動けるようになるには時間がかかるということをよく聞きます。

最近、高所作業車とチェーンソーの資格と一緒に、玉掛と移動式クレーンの講習と一緒にやって貰えないかという具体的な要望を初めていただきました。造園の仕事に沿って、必要な技術や資格を学べればそれに越したことはありません。人材育成の効率化一つをみても、まだまだいろいろなことができると思います。

土志田 個々の会社で対応できないから協会があるのであり、存在意義やメリットを語るのにはある意味ではナンセンスです。しかし、そう思っていない方もいるので、会員の活性化や会員拡大に向けては、日造協のこんなところがいいところだと、分かりやすく示した案内が必要になっているのかもしれない。

持田 協会の必要性を感じて創設された方々と、既存の協会に入会する方々の感覚

「素晴らしい造園」の認知度を上げよう

酒井 部会の話が出ましたが、当部会では造園に認知度が低いと聞きます。

これは、造園の仕事が多様かつ、広範囲であるということもありますが、造園の仕事の説明する際に、「ゴルフ場や公園をつくらしている」ということだけでは、一般の人や中高生に造園という仕事が伝わらないのではないのでしょうか。

例えば、松戸さんだと、総務、経理になるとありますが、造園業というフレームと、その中で、総務や経理は何をするのか。内

の違いは、仕方がないかもしれませんが。会費を払う自分はお客様で、協会は何かしてくれるのが当然との認識を持っている人もいます。

私も以前は、「支部」「本部」と口にしていましたが、最近「本部も大変なんだから」といったら、「どうしちゃったの」といわれました。というのは、協会活動に積極的にかかわるようになり、限られた事務局の方々とそれぞれの委員の方たちが相当な負担を抱えていることがわかりました。多忙な中、都合をつけて会議に参加し、深夜遅くまでメール交わしたりしています。会員はお客さんではなく、同じことに取り組む仲間、誰かにやってもらうのではなく、皆で背負っていくものだと気づき、「支部」「本部」といっても始まりず、どうやらできるかを考えるようになりました。

私自身、会員拡大の検討が協会を再考する機会になりました。ですから、どうしたら造園業や日造協が良くなるかを皆で考える機会、造園を考える仲間を増やす取り組みだと考えています。

酒井 支部と本部のやりあいはあってもいいと思います。ただ、お互いに文句をいうだけなら不毛ですが、文句ではなく提案をして、それについて議論を交わすのはいいと思います。

和田 今回の会員拡大も、持田さんから提案があり、それではというのが発端です。本部という何でもできる存在があるわけではないことを理解していただき、支部や各会員の力が本部の力にもなっていく、そういう組織力が協会なのだと思います。

持田 提案すれば本部がやってくれるだろうと思っていて、まさか自分がやることになるとは思っていませんでした。期待した成果が得られるか分かりませんが、現在頑張っているところです。

の仕事をし、自分の得意分野とは少し違っていても、次の仕事で活かせるかもしれませんし、まったく別の分野を学んだ人でも、これから造園に入ってこようと思っている人が活躍できる場がきっとあります。

実際、美術を学んだ人が、ディスプレイや花壇デザインで力を発揮したり、ヨガ等のスポーツインストラクターの経験を活かしたり、多様な造園の業態は、いろいろな人を受け入れ、活躍しています。

しかし、だからこそ会社の軸もきちんと示しておかないと、入社したけれど個人と会社の考えがあまりに違えば、不幸な結果になってしまうと思います。

造園業がやっている仕事、会社がやっている仕事、個人がやっている仕事のそれぞれのレベルで説明しないと不十分なのではないでしょうか。

持田 造園をどう伝えるかですが、広く一般、学生、職員など、対象によっても変わってくるでしょうね。

酒井 部会の話の中に、仕事の紹介をする機会があったそうですが、造園の仕事は紹介しないで欲しいと学校から要望があったそうです。いわゆる3Kといわれる建設業のイメージが悪いのか、土にまみれるような仕事のイメージが悪いのか定かではありませんが、残念なこと。造園がいかにか素晴らしい仕事かを、もっと知っていただく必要があります。

そのための方法として、造園を解説する出前講座などをやっていくといいかもしれませんね。

土志田 「緑や環境は大切ですよ、それを守り育てているのは、造園なんですよ」など、そういう言い方の工夫などもしていかなければならないのだと思います。

下地 建設マスターの表彰に合わせて、子どもたちからお父さんお母さんの仕事についての作文が紹介されたり、振興基金が、建設業への想いを綴る高校生の作文コンクールを行っていると聞いていますが、日造協がそういう作文を募集し、表彰機会があってもいいと思います。

井上 造園イコール植木屋さんと認識している人も多いと思います。造園という言葉自体を知らない人もいる中で、造園の仕事を知ってもらえるのは本当に大変ですが、子どもたちが楽しんで、職業体験ができる「キッズニア」のように、造園の仕事を楽しく体験できる機会などがあると、いいと思います。

ともに学ぶ機会、交流の機会を増やそう

松戸 楽しい職業体験はいいですね。一方で、大人も造園に関する知識を得たり、業界の人たちがともに学ぶ機会もあるといいと思います。当社の場合、若い方が入ってきても、ベテランの方は自分の仕事が忙しく、若手を育てるところまでなかなかいきません。そのため、職業訓練校で造園を学んだ人の採用も多いです。大きな会社だとそうではないかもしれませんが、日造協が拠り所となり、技術を学ぶ機会があるとありがたいと思います。

和田 東京では以前、業界の訓練校がありましたが、参加する人が少なくなり、休校しています。しかし、要望があれば、再開を検討してもいいかもしれません。

酒井 学びの機会を求める声は多いです。教えるベテランの問題だけでなく、以前は学びの場となるいろいろな仕事や十分な仕事量がありました。それがなくなった現在、その対策は不可欠です。

和田 予算の問題もありますね。少し余裕があるときは、半端人足を付けられますが、ぎりぎりの予算だとそういうこともできません。若手に一人働いてもらわないと会社が回らない現状も打破していかなければなりませんね。

下地 なかなか若い人に残ってもらうのは難しく、当社も結果的に転職者や訓練校で造園を身につけた人になっています。人材確保が難しくなる中、協会によるスキルアップがあるといいです。補助金などを得られる仕組みを日造協で考え、それをベースに地域の形に合わせて取り組んでいくようなことができれば、個々の会社の負担が減ると思います。

持田 造園ではありませんが、商工会議所で、電話応対などの新人研修を行っています。異業種ですが、同世代の交流ができるので、参加企業の離職率が減ったとの話もあり、日造協でも県支部単位でそうしたことができると思います。

酒井 部会でも造園のオリエンテーションを新入社員にして欲しいという意見がありました。造園を上手く説明できない会社もあるでしょうから、その解決にもなるでしょうし、格好いいスタッフ養成になれば、造園の魅力になると思います。

井上 地元の異業種でそういうことはありますが、日造協でできれば、一般的なことでなく、造園ならではのこともできるし、業界に仲間がいることがいい刺激や連帯感にもなると思います。

和田 造園・環境緑化産業振興会をベースにするのもいいかもしれません。日造協の会員だからそういうことができるというメリットにもなると思います。

そのほか、何か日造協で取り組めるアイデアなどはありますか。

持田 日造協の総会前後に地域リーダーズが勉強会などを企画し、メンバーが総会に参加したことがあり、その後、総会時期に行く行かない？と連絡を取り合い参加するようになったメンバーもいるので、そういう企画もいいと思います。

酒井 総会に合わせて、経営者だけでなく若い方が好みそうな講演などを企画したりするのも面白そうですね。

持田 講演会の企画だけでなく、前後の複数企画でもいいかもしれません。

また、現在、会員拡大と女性の部会が別々に動いていますが、こうした会議も合同でやったり、部会に限らず、趣味別や若手の男女が参加した交流などもあっていいと思っています。

酒井 そういう機会こそ大事で、どんどんやるべきです。

和田 若手男女が参加した婚活にまで話が広がっていましたが、活気にあふれた造園業界になることはいいですね。

毎年恒例の造園界の新年会「造園人の集



和田 新也氏

い」も昨年から女性が半額になりました。若い人、1社2人目からの割引などがあったのもいいのかもしれませんが、すでにあるこうした機会を活かし、もっと多くの人が交流するといいのではないかと思います。

今日は限られた時間の中、日造協の存在意義から、つながりや交流など、会員拡大や活性化に向けた数多くのヒントをいただきました。今後、机上の議論ではなく、これらを実現させるべく、「本部」「支部」ではなく、会員一丸となった取り組みが大切だと思います。本日は貴重なお話しをありがとうございました。